

修士論文(要旨)

2015年1月

接触場面における上級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3008

谷 莎

Master's Thesis (Abstract)
January 2015

The Use of Communication Strategies by Advanced Japanese Language
Learners in Contact Situations

Sha Gu
213J3008
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Sumiko Horiguchi

目 次

第 1 章 はじめに	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.1 研究の背景と動機	エラー! ブックマークが定義されていません。
1.2 研究の目的	エラー! ブックマークが定義されていません。
第 2 章 先行研究	3
2.1 CS の定義	3
2.2 CS の分類	3
2.3 学習者が用いる CS について	3
2.4 本研究の位置付け	4
第 3 章 調査概要及び分析方法	5
3.1 調査概要	5
3.2 分析方法	7
第 4 章 調査の結果及び分析・考察	10
4.1 中国人学習者が用いる CS の種類と使用頻度	10
4.2 中国人学習者が用いる CS の使用特徴	12
第 5 章 総合的考察及び日本語教育への示唆	30
5.1 使用した CS の選択理由	30
5.2 使用した CS の成否に関わる要因	35
5.3 日本語教育への示唆	39
第 6 章 まとめと今後の課題	40
6.1 まとめ	40
6.2 今後の課題	41

参考文献

添付資料

中国人日本語学習者が日本語母語話者と接触する際に、様々なコミュニケーション上の問題が発生する。本研究は、それらの問題解決に有効なコミュニケーション・ストラテジー（以下、CS と略す）に着目し、自己解決型 CS と共同解決型 CS、達成促進 CS を中心に、中国人上級日本語学習者が用いる CS の使用実態と使用特徴を明らかにすることを目的として行った。

CS の定義と分類に関する研究は少なくない。その例として尾崎（1998）、藤長（1996）、方（2010）などがある。また、初中級日本語学習者が用いる CS についての研究としては、伊藤（2000）や大野（2004）等が挙げられる。先行研究の不足を踏まえ、本研究では、中国人上級日本語学習者と日本語母語話者との初対面の自然会話データを利用し、中国人上級日本語学習者が用いた CS の使用実態と使用特徴を分析し、CS 使用頻度の違いの原因と、使用した CS の選択と成否に関わる要因も考察した。

本研究に使用したデータには予備調査と本調査の両方のデータが含まれている。日本語母語話者1名と調査協力者である中国人上級日本語学習者7名で1対1のペアを7組作り、15分間程度の初対面会話データを入手した。また、方（2010）を分析の枠組みの参考にし、文字化のデータから自己解決型 CS と共同解決型 CS、達成促進 CS を抽出し分析した。

調査の結果として、中国人上級学習者が使用する CS 全体で、達成促進 CS が最も多く使われた。また、達成 CS の中で自己解決型 CS の使用頻度は共同解決型 CS のほぼ2倍である。これは、上級レベルである学習者が、母語話者である聞き手と共同して問題を解決する共同解決型 CS の使用より、独力で問題を解決する自己解決型 CS を使用する傾向が多いためだと考えられる。また、自己解決型 CS において、使用頻度の上位の3つは順に「再構築」「置き換え」「解釈」であった。このことから、相手に理解してもらうように、一定の日本語能力を持っている中国人上級学習者が、困難がある言葉を他の表現に置き換えたり、間違った日本語を修正したりする傾向が明らかになった。一方、共同解決型 CS においては、「間接的な協調要請」が最も多く使用された。この結果から、上級学習者が明確に母語話者に助けを求めることより、上昇イントネーションを用いたり途中まで言い淀んで運用限界を示したり、間接的な協調要請のストラテジーを使う傾向にあることが分かった。達成促進 CS については、中国人学習者は共同解決型 CS と自己解決型 CS を用いた際、フィルターや繰り返しなどの達成促進 CS を連続的に使用する傾向にあることが見られた。また、「あの」や「その」、「えー」など時間を稼ぐ達成促進 CS は協力者全員に多く用いられているが、協力者自身の好みや個人差によって、各表現形式の使用頻度に明らかな相違が見られた。なお、方（2010）の分析の枠組みに当てはまらない「簡略化」と「同化」も CS として1、2例使用されていた。

さらに、中国人学習者の使用した CS の選択に関わる要因を、CS 使用に関わる制約の理論とポライトネス理論からより深く考察した。自己解決型 CS 使用の選択は、外的な制約と内的な制約の2つの制約、そして「明瞭性」「経済性」「規範性」の3つの原則の相互作用の結果であると言えるであろう。一方、共同解決型 CS の選択は、CS 使用による中国人学習者と日本語母語話者の面子への侵害度の大きさにかかっていると考えられる。また、使用した CS の成否に関わる要因について中国人学習者側と日本語母語話者側の両方から検討すると、学習者が提供する情報の適否と量、または母語話者側の積極性や、調整の適切さが、CS が成功するかどうかに関わっている要因だと思われる。

以上の分析と考察の結果から、コミュニケーション上の問題を解決するのに大きな役割を果たしている CS を学習者に意識的に指導していく必要があると考えられる。中国人学習者の性差と年齢差によって使用する CS は変わるのか、言語レベルは CS の使用にどのような影響を与えるのかなどの課題はあるが、本研究で明らかになった中国人上級日本語学習者が用いた CS の使用実態と使用特徴の結果が、日本語教育現場における CS 指導への示唆になれば幸いである。

参考文献

- 青木直子・尾崎明人・土岐哲(2001)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 猪狩美保(1999)「初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジー—初級日本語教科書との関連から—」『横浜国立大学留学生センター紀要』第6号 pp.15-25
- 伊藤かな(2000)「初中級日本語学習者の用いる協力ストラテジーについて」『岐阜大学留学生センター紀要』2000 pp.38-52
- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究」『日本語教育通信』42号 pp.7-8
- 大野陽子(2003)「初級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー—『発話のストラテジー』使用についての考察」『三重大学留学生センター紀要』第5号 pp.55-65
- 大野陽子(2004)「中級日本語学習者の『発話のストラテジー』使用についての考察」『三重大学留学生センター紀要』第6号 pp.83-93
- 岡本能里子(1991)「コミュニケーション教育から見た日本語教育と国語教育」『日本語学』9月号 pp.28-36
- 尾崎明人(1981)「上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45号 pp.41-52
- 尾崎明人(1992)「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp.251-263
- 許挺傑(2010)「日本語学習者の発話ストラテジーについての一考察—第二言語習得環境にいる中上級学習者の縦断的データを用いて」『筑波応用言語学研究』17 pp.111-124
- 許挺傑(2012)「接触場面における日本語学習者の共同解決型発話ストラテジー使用についての一考察—ポライトネスとの関わりを中心に—」『日本語教育研究』(3) pp.109-125
- 高見澤孟他(2004)『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』ask
- 武井直紀・赤堀侃司(2005)「Leveltモデルをもとにしたコミュニケーションストラテジー分析」『電子情報通信学会論文誌』pp.16-24
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法：疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』おうふう
- 中谷安男(2005)『オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究』開文社出版
- 福富奈美(2010)「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究言語情報編』第5号 pp.105-125
- 藤長かおる(1996)「初中級日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察—話し手としてのコミュニケーション・ストラテジーの観察—」『日本語国際センター紀要』(6) pp.51-69
- 方穎琳(2010)「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に—」『言語文化と日本語教育』39号 pp.122-131